

奥さんがたの力があればこそその有機農業だ

(新篠津村 北海道農業士 ^{みょうごじ} 妙護寺 博文 氏)

1 経営の概要

- (1) 有機栽培経験年数 13年
- (2) 経営規模 0.9ha (うち有機栽培 0.53ha)
- (3) 労働力 家族4人
- (4) 作物別作付面積 (平成21年)

作物名	作付面積	うち有機栽培
ミニトマト(ハウス)	0.25ha	0.25ha
スイートコーン	0.60ha	0.28ha
平飼い鶏	3,000羽	

2 有機農業取組の経緯等

(1) 取組の動機

- ・ 水稲+畑作農家であったが、平成9年に経営転換を図り、平飼い養鶏を始めた。
- ・ 有機農業への取組は、大手外食チェーンとの取引がきっかけ。

(2) 取組の経過

- ・ 有機農業への転換は土づくりから始まり、生産物の形や虫などの課題への対応に3~4年かかった。
- ・ 平成9年に村内の有機農業者7戸で「有限会社オーガニック新篠津」を設立。

現在は株式会社化し、11戸から構成される「株式会社オーガニック新篠津」の代表取締役を務めている。



写真1 妙護寺氏と平飼いの鶏

(3) 有機農業取組の考え方

- ・ 自家製発酵鶏糞を使用した循環型農業を実践している。
- ・ 輪作の一環としてハウス落花生を導入した。
- ・ 有機農産物は付加価値がついているので、きちんと作っていけば売れる。有機農産物を探している会社は多い。
- ・ 11月~12月に契約し、物量をきちんと確保するため契約に基づく作付計画をたてる。
- ・ 取引先からは「農家はどんぶり勘定をしすぎる」「コスト計算から始めないとだめだ」と教えられた。

(4) 有機 JAS 認定の取得

- ・ 有機 JAS の取得は検査認証制度が始まった平成 13 年。

3 有機栽培管理技術等の特徴

[有機栽培管理の概要]

(1) ミニトマト

- ・ 5 月上旬に定植を始め、6 月 25 日まで続ける。
- ・ 2 本仕立て 1 ベット 2 列植え。平植えマルチ使用。マルチは 2 年使用。
- ・ 苗は 2 葉半になったら切って挿す断根挿し木栽培を行っている。
- ・ ポットは 5 つ穴のあるものを使用。ポットに入ったまま定植し、根域を制限している。
- ・ 日当たりと空気の通りを良くするため、過繁茂にしないことに注意し、病害の発生を抑えている。
- ・ 途中での追肥はほとんどしない。1 段目から糖度の高いものを作っていくように心がけている。
- ・ 品種はキャロル 10、千果、サンチェリースマイル、イエローミミ、シシリアンルージュを使用。
- ・ 葉かび病抵抗性の CF 千果などを今後導入予定。
- ・ 灌水は根元に定植後やるが、益過ぎにはほとんど灌水しない。受粉作業はしていない。
- ・ 基肥は秋に鶏糞を施用、4 月下旬に数種の有機肥料を施用。

(2) スイートコーン

- ・ スイートコーンはほとんど秋施用の鶏糞のみで栽培している。
- ・ 7 cm ポットで育苗し、2.5 葉期に畝間 60cm 株間 50cm で露地定植。葉数 7~8 枚で中耕。
- ・ 雄穂はアブラムシ対策のため受粉後切除している。
- ・ スイートコーンの作付けは土壌の透排水性、土壌改良の効果がある。

(3) 平飼いのニワトリ（有機 JAS は取得していない）

- ・ ポリスブラウン種。
- ・ 飼料は規格外の小麦・米ぬか・魚かす・大豆顆粒・貝殻・ビタミン・ニンニク・漢方薬を自家配合し、発酵させて与える。
- ・ 鶏糞は一部、5 層の曝気処理を行い、最後の無臭の液体を飼料の発酵処理に使用する（BMW 技術：バクテリア、ミネラル、水の頭文字を取った環境技術で、バクテリアと水と、鈹物の力で浄化する技術）。
- ・ 飼料を発酵させることにより鶏糞の臭いを抑えることができ、堆肥化の必要がなくなる。
- ・ 秋に鶏糞を施用したハウスは発酵熱により融雪剤を散布しなくても雪解けが早い。

4 生産物の出荷・販売

- ・ 「株式会社オーガニック新篠津」として、27 社と取引がある。

5 消費者との交流の取組

- ・ 北大の学生など数多くの視察を受けている。

6 生産者のつながり、関係機関・団体等との関わり

○(株)オーガニック新篠津

- ・村内の有機農業者 11 戸で経営する「株式会社オーガニック新篠津」では、有機農畜産物の生産・加工・販売、人材派遣事業、農作業の受託に関する事業に取り組んでおり、売り上げ 1 億円を目標にしている。
- ・取引先は 27 社。ミニトマト、スイートコーン、だいこん、にんじん、米など 20 品目を販売。売り上げの 3% を会社の運営費に充てている。
- ・構成員全体の JAS 有機認証取得面積は 28ha に上る。出荷計画の 7 割は契約栽培である。
- ・従業員 4 人を 8 ヶ月雇用し、11 戸の農家で 4 人を 3 日づつのローテーションを組んで作業をしている。こうした人材を確保するため雇用保険等、社会保障を考慮し平成 20 年 4 月に株式会社化。
- ・これまで有機農業の研修生 3 名が研修の後、新規就農し、構成員となっている。
- ・構成員同士のコミュニケーションは大切にしており、週 1 回は集まって打ち合わせを行っている。

また、年に 3 回、構成員の家族全員で集まり、雇用している人も含めコミュニケーションをとるようにしている。
- ・奥さん方の力があればこそその有機農業である。



写真2 研修生向けテキスト

○その他

- ・新篠津村では、農協はじめ関係団体が連携し、村ぐるみで環境との調和に配慮したクリーン農業を推進しており、新篠津村クリーン農業推進協議会やEM農法に関する事務局を農協が担い、地元のネットワーク化を図っている。
- ・全国組織では JOHF (Japan Organic Heart Farmers-Food-Family) とのつながりがある。

7 今後の課題と方向

(1) 今後の課題と取組の方向

- ・親も年をとるし、人を雇いたい。借りられる土地があれば有機栽培を拡大したい。

(2) 新たに有機農業に取り組もうとする人へのアドバイス

- ・有機農業に取り組んだ当時、追い風に乗ったから、今やれている。
- ・夢ではなく、現実を見て本腰を入れてやっていくこと。
- ・農家を始めるには 2 年間の研修では無理。
- ・農業をやりたい人は本ばかり読まず、体で覚えることが必要。
- ・新規就農を希望する人は、往々にして目標が高すぎる。個人の営農計画をきちんと立て、生活費を含めた目標が大切。
- ・市場出荷は作って出せば良いが、有機農業はそうではなく、消費者や実需者とのつながりのほか、自分で販売するに当たっての顧客開拓や、経営感覚を身につけることが必要。

〈作成：石狩農業改良普及センター〉